

---

**私立相馬学園** ~ another tales ~

ransu521

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私立相馬学園 } another tales }

### 【Nコード】

N5690G

### 【作者名】

r a n s u 5 2 1

### 【あらすじ】

健太を中心に話が展開される本編とは別に、登場人物の誰か一人にスポットライトを当てて、その人を中心とした、いわゆる番外編というのを載せていく、短編連作作品。これを読む際には、本編のネタバレ等を含む場合がございますので、十分に気を付けてください。

## オリエンテーション旅行の裏側（前書き）

これを読む前に、まず『私立相馬学園』 a d a i l y l i f e  
『e』を

読んで頂けると、数倍面白さが増すかもしれません。

## オリエンテーション旅行の裏側

私立相馬学園と里川高校による、合同オリエンテーション旅行が、4月中に行われた。

その2日目、相馬学園の生徒達は、ハイキングに出かけていた。

これは、そのハイキングの時に里川高校の面々が何をしていったのかを描くお話である。

ハイキングの裏側

主演：早乙女愛

オリエンテーション旅行で、私は健太と再会出来た。  
とてもうれしかった。

そして、自分の想いを健太に告げる時が来たと思った。

私は、宿で健太に出会った時、告白しようとした。

けど、その告白は、見知らぬ人の邪魔によって、阻止された。

分かかって話しかけて来たのか、何も知らずに話しかけたのかは分からないけど、とにかく  
邪魔された。

でも、それでよかったと思ってる。

もし、あの時、健太君からの返事が『NO』だったらと考えると…

…。  
友達という関係を崩したくはなかった。

けど、その先まで行きたかった。

……なんだか、矛盾してるね。

怖かった。

関係が崩れてしまうのが、怖かった。

だから、これでよかったんだと、私は思う。

だからこそ、いずれはきちんと告白しなきゃいけないんだ。

私は、告白が出来なかったその日、布団の中でそう考えた。

「ねえねえ、好きな人とかっているの？」

同じ部屋で泊まっている人が、私にそう尋ねて来る。

こういう旅行とかでは、お馴染みの質問だ。

「えっと、この学校には、いないかな……」

「それじゃあ、他校にはいるの!？」

「どんな人? 教えてよ!」

こういう時の団結力というのは、時に恐ろしいものである。

私はあつという間に、1対4という勢力図を見せつけられてしまった。

「ま、まあ、他の学校には、いる、かな」

「それでそれで?」

私に次の言葉を催促してくる。

何というか、その勢いは、凄かった。

「優しくて、かっこよくて、強い人なんだ……って言うって自分が

「恥ずかしいよ〜！」

「お〜！」

部屋の人達は、そんな私を見て、何やらうなづいている。  
ま、まずい……。

「そ、それよりも、美紀ちゃんは誰かいるの？好きな人」

「私はいないよ。それより、愛の話、もっと聞かせてよ」

「切り返し失敗……。」

その後、私は、先生からの呼び出しがあるまで、ずっと聞きだされ  
ていた。

その後。

「あっちの学校はハイキングか。こっちは飯盒炊飯だって言うのに」

クラスメートの一人が、そう愚痴る。

そう、このオリエンテーション旅行は、いくら両校合同だからといつても、同じことをするわけではない。

今は、うちの学校は飯盒炊飯で、相馬学園はハイキングに行ってるらしい。

だというのに、誰か一人足りない気がするのには気のせいかな……。

「ああ、気のせいじゃないよ。何か、直樹の奴がいなっぽいよ」「直樹君が？」

何考えてるんだらう……（注：分からない人は、私立相馬学園〈a d a i l y l i f e〉のその24〜28を参照）。

「何してんだらう……」

「気になる？」

「全然」

即答だった。

「そりゃそうだよな。愛はなんて言っただって……ね」「う、うん……」

もはや広まっているみたいだ。

名前はギリギリ気づかれてないみたいだけど。

もしこの学校に情報屋がいたとすれば、かなりまずいことになるけど、さすがにそんな人は、

「まあ、名前はまだ分からないけど、情報屋として、必ず見つける



わ

いた……。

「ちよ、そんなことで本気にならなくても……」

「いいっていいって、気にするな」

「何を!？」

「とにかく。私は名前を調査するとしますか……個人的には、木村健太辺りが怪しいけど」

「な、何で？」

ビックリした。

どうして健太のことを知ってるんだろう……。

「情報屋を甘く見るな。身辺調査は基本だぞ」

「無断で私の身辺調査しないでください」

思わず敬語を使ってそう言っていた。

「あはは。気にしない気にしない」

普通気にすると思う。

「ま、近いうちに見つけちゃうんだから、覚悟しなさいよ」

ああ、きつとすぐに分かっちゃうなど、私はこの時思った。

「そんなわけで、これからもよろしくね、愛」

「うん、こちらこそ」

私達は、手を握り合った。

集会は、両校合同で行われる。

そして、今は相馬学園側の先生が、話をしていた。

「以上で、ミーティングを終わります」

あ、今終わったっばい。

「まあ、忘れて正解だろうな」

「主犯格は吉行でしょ」

どこかから二人の会話が聞こえてくる。

言うまでもない。

吉行君と健太だ。

「おい」

その時。

ふと、誰かに呼ばれるような声が聞こえた。

けど、その相手は、私ではなく、健太だった。

健太の周りに、人がたくさん……って私の愛好会の人達だ。

「おいおい、健太も変なのにモテるみたいだな」

「これはどう考えても違うでしょ!!」

吉行君の言葉に、健太がそう突っ込んでいる。  
ん？

何で健太だけ呼び捨てなのかって？

それは、健太とは、幼い頃からの幼馴染だからだよ。

「会長によりますと、この男、付き合っている女性がいながら、愛ちゃんにまで手を出しているとのこと」

「愛ちゃんにまで毒牙を向けるとは……なんてひどいやつなんだ!」

「いや、別に僕誰とも付き合っていないんだけど……」

健太、今フリーなんだ。

これはチャンスかも……。

けど、その前に、今は健太を助けないと……!!

「健太君に近寄らないで!!」

「って愛!?!」

健太の前に、私は立つ。

すると、隣に、

「健太君から離れてください!!」

「つてかなえさんまで!？」

あの人も立っていた。

確か、お風呂で知り合った人だ……。

……健太のこと、好きなのかな、やっぱり。

「そうか……お前はそこまで優柔不断だったのか」

「この女たらしめ!!」

「日本男児の恥だ!!」

「主人公補正反対!!」

「ええ!?そ、それは誤解だよ!!」

「問答無用!!」

「歯あ食いしばれ!!」

「え〜!?またこの展開なの〜!!」

結局、健太は追いかける羽目になったみたい。

努力した意味、なかったかも……。

そして、私の好きな人の名前が、木村健太だつて言うことがばれたのも、その数日後のこと  
だった。



## オリエンテーション旅行の裏側（後書き）

さてさて始まりましたお祭り企画。

私立相馬学園　↳ another tales　↳の始まりです。

愛「で、今回は何で私が選ばれたの？」

それはですね。

その55時点で一番出番少ないのが、あなただったからです。

愛「私、影薄いのかな……」

そうではないのですが、どうも他校の生徒っていう点が邪魔して…。

愛「うまく話が作れない、と」

そういうことです。

ちなみに、番外編でも、しばらくは主役張ることないので、悪しからず。

愛「え〜」

はいはい。

あ、予定していたタイトルと一部変更する場合もございますので、お気をつけて。

愛「それじゃあ次回もよろしくね〜」

いつ更新されるかわかりませんが、(おい)。

## 生徒会の日常

生徒会のメンバーによる、日常。

彼らがいつも生徒会室で繰り返している会話とは？

今回は、その話について語ることにしよう。

ただし、語り手は私ではない。

## 生徒会の日常

出演：生徒会メンバー

語り手：木村健太



僕が生徒会に入ってから数日が経過したある日のことだった。

「ふうむ……」

「どうしたんですか？先輩」

パソコン画面を凝視している先輩の姿がそこにはあった。

何を隠そう、彼こそがこの学校の生徒会長であり、大村充先輩だ。

「おお木村か……いやな、ちょっと困ったことがあってな……」  
「困ったことですか？」

何なんだろう、一体？

僕は気になって、大村先輩の向かっているパソコンの画面を眺めてみた。

「……えっと、先輩？」

「何だ？」

「これは……一体……」

「ああ。これはだな……」

「なんてことしてるんですか先輩……」

パソコン画面に映し出されている画像。  
それは……。

「生徒会長ともあるお方が、副会長である真鍋の写真を使ってアイコンですか……これは生徒会長の職を下ろすのに十分な証拠ですね」

「んなつ!? 明久……いつの間に?」

まさか吉田先輩がそこにいるとは思っていなかったのか。

大村先輩は、驚きの顔を見せていた。

……正直、こんなものを見せられた僕の方が驚きだよ。

「真鍋がそう言った服　メイド服とかナース服を着てくれないからって、どつから取ってきたかは

知りませんが、その写真に真鍋の顔写真を貼る……あまりいい趣味とはいえませんよ?」

「た、頼む! 瑞穂だけにはこのことを言わないでくれ!!」

「それ以前に、女性人には言いませんから、大丈夫ですよ」

僕は太田先輩にそう言った。

しかし、吉田先輩はそれでは納得いかないようだ。

「……そういえば、玄関前の落ち葉の掃除、まだ誰もやってませんでしたね。先生が人手を探してる

最中だったような気が……」

「何か俺、無性に掃除がしたくなった! だから俺、今すぐ先生の所に行ってくる!!」

(ダッ!)

大村先輩は、そのまま生徒会室を出て行った。

「……吉田先輩、なかなか惨いことしますね」

「まあ、ああでもしないと、会長を弄る機会なんてないからね」

「いや、会長なんですから、少しは慕いましょうよ」

まったく……吉田先輩という人は。

ひよつとしたら、隠れSなんじゃないだろうか？

「あっ！健太君に明久先輩！もう来てたんですか？」

「音羽さん！」

そこに入ってきたのは、音羽さんだ。

隣には、三倉先輩の姿もあった。

「よう三倉……」

「明久〜 この前の約束、覚えてる〜？」

「この前の約束って……何ですか？」

まったく聞き覚えのない単語に、僕は少し疑問の色を見せる。  
音羽さんも同じ様子だ。

「あ〜約束って言うのはね〜」

「言うな、三倉。恥ずかしいからな」

「恥ずかしい？」

「……なんでもない。早く仕事につけ」

「ていうか、会長がないんですけど……」

音羽さんが、その事について尋ねる。

「会長なら、先ほど玄関掃除をしたいと言って、外に出て行ったぞ」

吉田先輩。

棒読みなんですけど。

「玄関掃除？なる程……さすがは会長です」

ええ！？

そんな反応するんだ！？

「どうしたの？健太君」

「いや、なんでもないよ……」

「いやあ、会長は本当に人がいいですね」

「……吉田先輩、棒読みなんですけど」

追求したら、睨まれた。

だから僕は、それ以上何かを言うのをやめた。  
だって、怖いんだもん。

「とりあえず、水島。お茶を頼むよ」

「分かりました」

「それと三倉。お前はちょっと頼みたいことがあるんだが、いいか？」

「分かったよ」

吉田先輩は、歩美先輩に何かを言う。

すると歩美先輩は、どこかへ行ってしまった。

「何て言っ たんですか？」

「会長と一緒に玄関掃除を手伝ってこいって言っ といた……木村」

「何でしょう？」

「……これ、消すぞ」

「……はい」

その日。

大村先輩の立場は、守られたのだった。

ただ、数日後に大村先輩は、真鍋先輩のアイコン写真が真鍋先輩に  
バレて。

しばらく声をかけてもらえなかったのは、言うまでもないだろう。

それにしても、三倉先輩と吉田先輩の間に結ばれた約束というのは  
一体なんだったのだろうか？



## 生徒会の日常（後書き）

という訳で、番外編である『私立相馬学園　〈another tales〉』の再開です。

開設してから相当の時間が空いてしまいましたが、本編終了ということので、再開することに致しました。

ちなみに、ヒロインアンケートはこちらでも受け付けております。ドシドシご応募ください。

それでは。

## 引っ越してくる前

それは、とある少女が引っ越してくる前の話。

とある少女とは、健太の妹である美咲のことを指す。

よってこの話は、健太の住んでいるアパートにやって来る前の、美咲の話なのである

## 引っ越してくる前

主演・語り手：木村美咲

それは私が引っ越してくる前の話。  
今となっては、もう懐かしい。



あまりにも急すぎた、知らせだった。

「はあくお兄ちゃんに会いたいな〜」

私とお兄ちゃんは、元々は同じ家に住んでいた。

けど、お兄ちゃんが高校に上がった際、今の家からだと言いつつ遠いということ、アパートで一人暮らしをすることになったのだ。

「お兄ちゃん……」

お兄ちゃん。

私のことを救ってくれた、ヒーローみたいな存在。

一人ぼっちだった私に、家族にならないかと言ってくれたお兄ちゃん。

だから私は、お兄ちゃんのことを大好きなのだ。

お兄ちゃん以外の人を男として見ることも、ないかもしれない。

「美咲、ちょっと話があるんだけど、いいかな？」

その時。

お母さんが私の名前を呼ぶ声が聞こえた。  
なので私は。

「うん、大丈夫だよ」

そう言っつて、居間にあるソファに座る。

お母さんは反対側の席に座り、何やら言おうとしている。

お父さんも、お母さんの隣の席についていて、お母さんが何かを言うのを待っていた。

「お母さん達ね、来週から海外に行くことになったの。てへっ」  
「……………へ？」

一瞬自分の耳を疑ってしまった。

お母さん達が海外に行く？

まさかそんなこと……………。

「仕事の都合で行かなくてはいけなくなっただ。だから美咲。来週辺りには転校になるぞ」

「それじゃあ……………私も海外に！？」

そんな、いきなり過ぎだよ！

日本から離れて海外に行くなんて。

友達が……………お兄ちゃんがいるのに。

「違うわよ。中学を変えるだけよ。健太のアパートから通えるような位地にある学校に」

お母さんは、さぞかし嬉しそうな表情で、私に言ってくる。

……………ん？

お兄ちゃんの住むアパートの近くにある学校？

それって、まさか……………。

「美咲、転校手続きとか準備が済んだら、健太の住むアパートに行くきなさい」

「……………え？本当に？」

その日私はとんでもないことを知らされたのだった。

そして、その日の昼休み。

私は、朝の段階でその話を先生に伝えていた。

だから、クラスみんなはかなり驚いていて、私にいろんなことを言ってくれた。

嬉しかったなあ。

でも、何より一番驚いたのは、

「……呼び出したりして、スマン」

「いいっていいって……で、何の話？」

私は今、同じクラスの男の子に呼ばれて、屋上に来ていた。  
一対一で。

互いの瞳の中が見えるくらいに。

「あ、あのよ、木村」

「？」

私は、その先の言葉を待つ。

男の子の方は、やがて言葉を選ぶことが出来たらしく、何かを言う  
決意をしていた。

そして、言った。

「俺はお前のことが好きなんだ！だから、俺と付き合って……」

「ごめんなさい！」

「くれ……って、え？」

男の子の告白が終わる前に、私は謝っていた。

つまり、告白に対する返事がNoということだ。

「な、なんで？」

「それはね……」

私はここで一旦言葉を切る。

そして、言った。

「私には、お兄ちゃんがいるもん！」

「……って、話があったんだよ」  
「成る程ね……アハハ」

とある休日での話。

私とお兄ちゃんは、アパートの一室にて話をしていた。理由は、雨でどこにも出掛けることが出来ないからだ。

「暇だね……」

「そうだね……」

でも、私はこの時間は嫌いじゃない。寧ろ、好きの部類に入る。何故なら、

「……そろそろお昼にしようか？」

「……うん！」

隣でお兄ちゃんが笑ってくれてるから。

隣にお兄ちゃんがいるから。

ただそれだけで私の心は満たされる。

そんな簡単な、心。

時々前の中学での友達に会いたいと思う時があるけど。今はこの幸せを享受しようと思う。



引越してくる前（後書き）

ヒロインアンケート受け付けております。

## 生徒会長の恋

生徒会長。

生徒達の中で一番上に立つ、そんな存在。

だが、生徒会長とて人の子。

普通の人みたく恋もする。

これは、とある少女に恋をするまでに至る、とある生徒会長の物語である

## 生徒会長の恋

主演・語り手：大村充



あれは、俺が高校二年生の時であった。

高一の頃から生徒会として活動してきた俺は、その年も生徒会副会長を務めていた。

その年に、彼女　　真鍋瑞穂が入って来たのである。

「真鍋瑞穂です。書記として生徒会に入りました。分からないこととかもあるかもしれませんが、

どうかよろしく願います」

瑞穂のはじめの挨拶は、このような感じであった。

この時の俺は、まだ瑞穂のことなどどうでもいいといった感じであった。

何故なら、この頃の俺は、他人になど興味なかったからだ。

今よりも、周りに冷たく当たっている。

そんな時期だったからだ。

「……ふん」

だから俺は、その時こそ冷たくあしらっていた。

「大村先輩でしたっけ？一年間よろしく願います」

「ふん……精々この一年間だけでも頑張って働くんだな」

俺と瑞穂の始まりの会話は、こんな感じだった。

今思うと、何であの時あんな態度を取っていたのだろうか？

現在の俺の考えとはまったくま逆な……そんな態度。

と言っか、どうしたら今の俺になれるのかが分からない程だな

さて、俺が瑞穂のことを気になり始めるのには、そう難しいことがあったわけではなかった。

「先輩」

何を思っていたのか。

瑞穂は、俺によく話しかけてくるのだ（後ほど分かったことだが、自分より年上の人には全員に話かけることをしていたらしい。ちょっと恥ずかしいかもしれない）。

だが、俺は瑞穂のことを好きになったことに、後悔はしていない。美人で、胸も大きい。

これで生徒会の仕事もきちんとなし、八方美人。

人当たりもいいので、文句のつけようがない。

他人の欠点ばかりを探していて、その部分をとことん追及するタイプであった俺にとって、苦手なタイプであった。

だから俺は、コイツに欠点という物はないのかと、必死になって探していた。

当初はその目的だったのに、いつの間にか俺の心の中で、違う感情が芽生えてきた。

「（瑞穂について、もっといろんなことを知りたい）」

それは、何処からやって来た感情だったのだろうか。

そんなことを考えていた俺は、やがて瑞穂の人間性の良さ、性格の良さを知っていく内に、ドンドン惹かれていく自分がいることを自覚した。

「真鍋……瑞穂」

知らない内に、その名前を呟かない日がなくなった。

そして、その時にはこんな感情まで芽生えてきていた。

「（瑞穂を……俺の物にしたい！）」

この頃から、下の名前で呼ぶようになっていた。その変化に、瑞穂は若干苦い顔をするが、この際気にしない。そうして、高校三年生になって、俺が生徒会長になった時に。

「瑞穂……話がある」

俺はその日、いよいよ瑞穂のことを呼び出した。場所は屋上……ベタで悪いかよ。

他に二人きりになれるような場所はないんだから。

この学校は、何故か屋上への立ち入りが禁止されていない。だからだろうか、この場所に来る人って言うのは、あまりいないのだ。

「何ですか？大村先輩……いえ、今は会長ですね」

「どんな呼び方でも構わない……今日はお前に話があって、呼び出した」

「知ってます……それで、話というのは？」

瑞穂が、俺に尋ねてくる。

ああ……早く、俺の物に……。

「……会長？」

「あ、い、いや、なんでもない！……んで、話なんだが」

俺はついに、瑞穂に言う決意をした。

「俺は……お前のことが好きなんだ。付き合ってくれ！」  
「……はい？」

言った。

ついに俺は言ってしまった。

……早く返事を。

「……すみません、先輩。私は先輩と付き合っことが出来ません」

「……え？」

時が止まる感覚がする。

俺は、どんな気持ちでこの言葉を受け止めたのだろうか？  
今となつては、分かりたくもない。

しかし、一ついえるのは……俺はフラれたんだな。

「……好きな人とか、いるのか？」

俺の問いに、

(……コクッ)

瑞穂は顔を赤くしながら頷いた。

「……マジで」

この日、俺は確かにフラれた。  
しかし、だからと言って諦めるわけにはいかない。  
俺はこの日、そう誓ったのだった。

## 生徒会長の恋（後書き）

さてここで、お久しぶりのキャラとの対談コーナーと参りましょ  
うか。

健太「ど、どうも」

吉行「久しぶりだな」

ういゝす、二人とも。

吉行「ういゝすじゃねえだろ。お前、アンケートの方はどうなっ  
てるんだよ」

……今の所は何票か貰ってますよ。

けど、なんだかまだ足りない気もしなくもないですが。

健太「なる程……なら、もう少し貰えるように努力するべきだね」

ですね……。

というわけで、どうかヒロインアンケートの方も、よろしくお願  
いします！！

健太・吉行「よろしくお願ひします！！」「」

詳しくは、『私立相馬学園』a d a i l y l i f e』にて。

## 謎の少女の一日

いつも謎に包まれている少女がいる。

何故かいつの間そこにいて、なにやら不思議な言葉を残す。

そんな彼女は、どのような生活を送っているのだろうか。

これは、それについてを描いた物語である。

## 謎の少女の一日

主演・語り手：中川美奈

午前6時32分。

私はその時間に目が覚める。

「ん……」

ひとしきり目を擦った後、私は顔を洗いに行く。

その後、トイレ等に行き、制服に着替える。

私は一人暮らしなので、朝食等は自分で作る事となる。

この日の朝食は、目玉焼きを乗せたパンにすることにした。

パンをトースターの中に入れ、それと同時に卵を割り、フライパンの上に落とす。

そして、ある程度まで焼くと、同時にパンも焼ける。

我ながら、なんて流れ作業なのかしら。

「頂きます」

朝食を食べ終えるまでには、そんなに時間がかからない。

4、5分でそれを食べ終えると、皿を洗い、棚にしまったら、これにて学校に行く支度は完了。

そして私は、学校へと向かうのだ。

学校にやってきた私は、

「……なるほどな。確かにそうだな」



いつも私より早く来ている健太と吉行を見つける。  
そつと後ろから……というわけではないが、私は二人に近づくと近づくと。  
そして。

「……そうね。私もそう思うわ」

いかにも最初から会話に参加していたかのように、会話に混ぜざる。

「そつだよね……つて、美奈さん！いたんだ……」

大抵はこういう反応が返ってくる。

そのことに気づくとは……やはり健太はやるわね。

「いや、お前、絶対にそれ違うからな。俺でさえ気づくからな」  
「あら、レディの心の中を覗き見でもしたのかしら？」  
「するか！というか、気づかれないようにそつと近づくと奴がレディなんて言葉使うな！」

む……。

今の発言は少し訂正してもらいたいわね。  
けど、いいわ。

「今日の私は機嫌がいいから、許してあげるわ」  
「は？」

そう言つと、私は自分の席につく。

「……何だ？一体」

「いつもの美奈さんではあるよね」

そんな言葉が聞こえてきたような気がした。

……ところで私にも、気になる男の子の一人や二人……いえ、二人もいてはまずいわね。

とにかく、気になる男子はいたりする。

一応言っておくけど……健太のことではないわ。

私が気になっている男子が誰なのかは、自分で想像しなさい。

まあ、私の身近な人ってことに変わりはないのだけど。

「おはよう、美奈」

そんな時に。

「おはよう、かなえ」

かなえもやってきたので、朝の時間は、かなえと会話をする事で終わった。

放課後。

「今からショッピングに行くんだけど、美奈もいかない？」

ミサからこんな誘いを受けた。  
けど、

「ごめん。今日はちょっと無理なのよ」

そう。

今日は用事があって行けないのだ。

「そっか……それじゃあまた今度だね」

「せっかく誘ってくれたのに……ごめんなさい」

「いいって。てか、謝ることじゃないわよ」

まあ、そうでもあるわね。

「それじゃあ先に帰るわね」

「うん、また明日！」

「じゃあな」

「また明日！」

健太達に挨拶をすると、様々な反応が返ってきた。

私はそれを確認すると、廊下を走り、急いで下駄箱へと向かう。  
途中、

(ドンッ！)

誰かにぶつかった気がしたが、この際無視の方向で。

「おい、ちょっと待てよ！」

無視無視。

目指すは……！！

家に帰って来て。

「ふう………ついに手に入れた」

不敵な笑みを浮かべてしまう自分がいた。

右手には紙袋。

中身は………先程買ってきた、K yの新作ソフト。

用事と言うのは、今日がP 2専用ソフトである、新作ソフトの発売日だったってこと。

………大した用事でもなかったわね。

これなら、買い物についていった方が楽しかったかしら。

「………ま、いいわ。早くやりましょ」

そう呟くと、早速それを起動させる。  
本日は、それ以降はゲームをして過ごした。

どうかしら。

これが私の一日の流れよ。

最も、私としては夜が一日の始まりなのだけどね。  
それじゃあ、またの機会にお会いしましょう。



## 熱血教師過去物語

私立相馬学園の教師である、外川隆平。

今でこそ教師という職についているが、その昔は本当に荒れていた。

こんな青年が、何故教師になることが出来たのか。

今回はそのことについて語って行くことにしよう。

## 熱血教師過去物語

主演・語り手：外川隆平

あれは俺が高校生の時の話だった。

当時の俺は、自分で言うのも難だが、かなり荒れていた。周りからの手を、すべて受け付けなかった。

慣れ合うのが嫌だったのだ。

自分でも驚くほど、人間と言う生き物に対して反感を持っていたのだ。

だから、俺は人と深く関わるのを、やめていた。

家族にも、本当の自分の心を打ち明かさずに、ただ他人同様の扱いをしてきた。

そんな俺の周りからは、人がいなかった。

家族でさえ、家族なんて殻を破ってしまえば、所詮他人でしかないと思っていた。

けど、そんな俺のねじ曲がった性格を、一から根本的に変えてくれた人がいた。

その人がいなければ、俺は今頃こうして教師をやっていないだろう。俺はその人に感謝している……今はどこにいるのか知らないけど。

「うるせえな……黙ってるって言ってんだろ」

最初こそ、俺はその教師に対して反感を持っていた。

だから、礼儀なんてものは知らない。

敬語なんて、もつてのほか。

それにも関わらず、



「はいはい。そうやって言うておいて、実はかまって欲しいだけなんですよね?」

「はあ!?!」

その教師は、俺に対してそんなことを言うてきたのだ。

「んなわけねえだろ。どうしてお前なんか……」

「はいはい。それじゃあ授業を続けますよ」

「話を聞けつての!」

まったくもって、俺の言葉を流すのがうまかった。

……俺のことを、そこまで分かってくれていた、といってもいいのかもしれない。

だが、そのことに気づいたのには、あまりにも遅すぎた時だった。

俺がちよつとした油断をしてしまい。

喧嘩していた連中に、ボコボコにされていたその時だった。

「あなた達……何してるの!!」

その教師が、俺達の所まで歩み寄って来る。

あんたが来た所で、無意味なのは理解出来るだろ。

なのに……どうしてあんたは、こんな所にまで来るんだよ。

「あん?……つて、若い女じゃねえか!」

「これはイケルぜ!!」

「あがつてきた!上がって来たああああああああああああああああああ!!」

興奮する野郎共。

畜生……俺の体が言うことを聞いてさえくれれば、こんな奴ら、ひとたまりもないのに。

「自分達がやってること、恥ずかしいとは思わないの?」

「思わないねえ。だって、ぶつかって来たのはこいつだし」

「謝りもしないんだぜ?そんな礼儀知らずの為に、お仕置きしてやつたってわけよ!」

「……」

何も言い返さない。

不良達つて言うのは、こういう時に限って正論を持って来る。

……やってることはあまりに理不尽だが。

だが、その教師は、反抗のまなざしをやめなかった。

「いい加減にきなさいよ、あなた達……」

「あん?」

「いい加減にきなさいって言ってるのよ!」

「!?!?」

突如叫ぶ。

否、叱る。

どうして……こいつらに対して何の抵抗もないのか？  
そして何より……どうして俺のことをそこまで構う？

「外川君は、私の大切な教え子よ！だから、その子を返しなさい！」

「教え子？まさかあんた……教師か！？」

「最高だ！若い女性教師なんて……今夜はいい収穫を得たぜ！」

「それでもないわよ？」

「はあ？」

（ブウン！）

「ぐはっ！」

「……え？」

一瞬、何が起こったのか理解出来なかった。

いやいや、ありえないって。

この人が、こいつらのうちの……恐らくはリーダー格に値する奴を  
ぶん投げたなんて。

「……こういうことよ」

「り、リーダーが、一投げ……」

不敵な笑みを浮かべ、その教師は男達に近づく。

……すげえ。

初めて人が、強い生き物なんだって……いや、強い人もいるんだな  
って思えた。

この人になら、関わってもいいかなって思える自分がいた。

「まだ、投げられたいかしら？」

「す、すみませんでした！！」

(ダッ！)

男達は一目散に走り去っていく。

そして残されたのは、俺とその教師のみとなっていた。

「……礼なんて言わねえぞ」

「礼なんていらぬわよ。それが目的で助けたわけじゃないしね」

「……でだよ」

「え？」

「何でだよ。何で俺に構うんだよ。俺はこんな奴だぞ。周りから冷  
たい目で見られて、家族にも相手に

されなくて……一人にいるような奴に、どうして関わろうと……」

「だからこそ、よ」

「は？」

意味が分からない。

一人にいるような奴は、一人きりにさせておけばいいのに。  
周りに関わろうとしない奴には、関わらなければいいのに。

「一人きりているのは……寂しいもの。かつて私がそうだったよう  
に、一人きりって言うのは、寂しい

物なのよ。私は、そんな子が……私のような子が生まれないように、教師になったのよ」

その一言が、俺の人生を変えた。

## 熱血教師過去物語（後書き）

ちよつとしたお知らせです。

私こと、ransu521と、星うさぎさんと、合作小説を書くことが決定致しました！

詳しい話の設定とかはまだ未定ですが、どうか楽しみに待っていていただけると、ransu的にも嬉しいです。

それでは、『Magicians Circle』の方の連載が近づいてきている、ransu521でした。

## 日記

ずっと入院生活を送り続けている、静香。

彼女の病院での生活とは、どのような物であったのか。

それを見る為に、今回は日記形式でそれを伝えていこうと思う。

静香がつけていた日記を、ここに載せてみようと思う。

## 日記

主演：青水静香

6月 日。

初めて私は、この病室に入院した。

原因は、ガンらしい。

けど、早期に発見出来たのが幸いしてか、命に別条はないらしい。後4か月程はかかるけど、一年とか二年とか、長い間入院しているわけではないらしい。

けど、テレビとかでよくガンについてのテレビがやっていたりするけど、まさか自分になるとは思ってもみなかったことだ。

……みんな、元気にしてるかな？

(中略)

7月 日。

夏休みに入りかけたとある日。

早乙女さんが見舞いに来てくれた。

「元気？」という問いに対して、「はい」と答える私。

その後、何食わぬ日常会話をしてその日を過ごし、

「じゃあね!」「はい。またいらしてくださいね」「もちろん!」

こんな会話をして、その日は来客は誰もこなかった。

けど、早乙女さんの話に出てきた「けんた」って言う人は、どんな人なのだろうか？

(中略)

9月 日。

9月も終わりに近付いてきたその日。

この病院に、急患が運ばれて来たらしい。

らしいと言うのは、この話はいろんな人から聞いた話だからだ。

実際に私が見たわけではない。

確か、私と同じくらいの年の男の子ということだったけど、どんな人なんだろう?……ちょっと不謹慎だけど。



(中略)

9月×日。

運ばれて来たと言う話を聞いた次の日。

特にすることもなかった私は、空を見に屋上へと向かった。

フェンス越しに見える景色は、とても青かった。

雲一つない空だったと思う。

もうここまできると、私は退院出来るのを待つのみだ。

そんなことを考えていたその時。

私は 一人の男の子に出会ったのだった。

始めに見た時は、優しそうだなという印象を受けたが、実に印象通りの人だった。

どうやら彼は記憶を失ってしまったらしく、自分の名前すらも、人伝に聞いただけらしい。

名前は確か……『木村健太』君。

早乙女さんが言っていた『けんた』って、この人のことなのかな。

9月 日。

私の心の中で、次第に健太君の存在が大きくなって来ているのが感じられた。

健太君の笑顔が、頭から離れない。

健太君のことしか、考えられない。

でも、健太君のことを考えると、体が熱くなる、心臓がドキドキと喧しい程に音を鳴らす。

この気持ちは、一体なんなのだろう？

でも健太君はその日、退院した。

(中略)

10月 日。

やはり健太君のいない生活は、前と同じで静か過ぎて、寂しい感じがした。  
たまに屋上に行っては、来てることを期待してみるのだが、結局来ない。  
こんな寂しい生活をしていたのかと、実感してしまった。

(中略)

1月 日。

年が明けて間もない時に、私は倒れた。  
理由は肺炎だったので、普通に治療をしていけば治るものであった。  
そしてその日、私は見舞いに来てくれた健太君に、告白した。  
健太君に対する私の想いが、爆発しかけていたからだ。  
答えとして返ってきた言葉は、「……ごめん」だった。

その時私は悟った。  
私は、健太君にフラれたのだと。  
けれど、最後に一回だけ、キスをさせてもらった。  
最初で最後のキス。

私は恐らく、もうキスをすることはないだろう。  
何故なら、私は健太君以外の男の子を、好きになれそうにないからだ。



ちょっとしたお知らせです……

ども。

相変わらず忙しい、ransu521です。

この度は、ちょっとしたお知らせをするべく、この場を設けました。さて、現在連載中であります、「私立相馬学園　〈another tales〉」ですが、「Magicians Circle」の連載開始に伴いまして、しばしの間休載することとなりました。本当に突然のお知らせですが、どうかご理解の方をよろしく願います……。

さてここで、ヒロインアンケートの途中結果を……と行きたい所ですが、正直票が全然揃ってないという結末。

ふうむ、現実というのは意外に厳しい（キョ　風に）。  
社会の……まあ、これ以上言ってしまうと著作権的に、ね。

とりあえずヒロインアンケートの方は、「私立相馬学園　〈daily life〉」の方でも、こちらの方でも受け付けていますので、暇な方はどうか投票してみてください。

そうすると、作者はかなり喜び、その場を回転しながら「ヒョ〜！」とか奇声上げてるかもしれません（外でやったら警察か病院送りだな……）。

さて、気になる「私立相馬学園　〈murther end tale s〉」の連載開始がいつなのかですが……予定では、出来れば11月中に第一話を書けるようにしたいと思っています。

第一話は、今の所票が一番多い（と言っても、一位で二票という結果ですが）、早乙女愛を中心に書いて行く予定です。

このキャラは、作者的にも思い入れが……あれ、特にないかもしいない？

まあ、無印版ではいくらか優遇されていた方だとは思っていましたが（実は愛がメインヒロインになるという話もあったくらい）、

a daily life」になってからは、めつきり出番が少なくなってしまうた、ある意味一番救われてないキャラです。テーマ等は、現在考えている所です。

とりあえず、ヒロイン12人+ ということで、かなり長くなることが予測されます。

しかも、作者の独断と偏見によって、一人一人の話の長さに、差が出る可能性も出ます。

その辺はご勘弁を……。

長話はこの辺にして、私はそろそろ退出するとしましょう。

ちなみに、第一話が載せられる前に、ヒロインアンケートの結果が変動したら、その現在での第一位のヒロインの話を書きたいと思えます。

それでは。

「私立相馬学園」multihend tales」、「Magicians Circle」の方でお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5690g/>

---

私立相馬学園 ~ another tales ~

2010年10月10日07時37分発行